

特 248  
161

我が國政を回顧して

西園寺公、牧野伯の隱退を促す

實川時治郎述

1



0003831-000

特 248-161

我が國政を回顧して西園寺公、  
牧野伯の隱退を促す

實川時治郎・述

椎名佐喜夫

昭和 8

ABA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第 67 条の規定に基づき、平成 12 年 3 月 2 日  
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです



此の小冊子は、既に昨年九月十五日の愛國新聞紙上に私の談話として掲載せられたものでありますが、時局に鑑み若干字句の修正を加へて再梓することにしたものであります。

### 我が國政を回顧して

#### 西園寺公、牧野伯の隱退を促す

昭和六年九月十八日夜、滿鐵沿線柳條溝鐵道爆破事件を契機として爆發したる滿洲の事變は、世界的に一大波紋を生じた。

この重大な性質を帯びたる事變の報導せられた時、元老西園寺公は偶々東京都田中の清風莊で初秋の情緒に浸つて居られた。その時公は、果してどんな心持を持つて、どんな風に、この事件を見られたであらうか。我々の公に聞かんと欲する處である。

公の推薦せられた若槻内閣は九月十九日臨時閣議を開催し、列國に向つて「今回滿洲に於ける出先官憲の行動は本政府の與り知らざる處」と聲明し、關東軍司令官に對しては「貴官の行動は本政府の甚だ遺憾とする處」と訓令せら





れたご記憶する。

當時の外務大臣は幣原男であつて、公とは豫ねてより國際通念に於て肝膽相照らすものありと傳へられた事から推測するならば、公も亦之の聲明乃至は訓令と略々似た様な考へを持つて居られたものご推測する事が出来る。或は之と反對の考へを持つて居られたかどうか、我々の疑惑は實に此處に存する。

我々は柳條溝の爆破を企てたことを問題にす可く餘りに、より以上の日支衝突の場面ごその事情とを長年月に亘つて記憶して居る。だから之の事件の勃發を見て寧ろ來る可き處に來たものご感じたのである。それは何故か。思ひは遠く日清戦争後の三國干涉當時に走る。更に其の後日本をして遼東半島を支那に還付せしめた于涉國である、その當の露西亞が着々として滿洲一帯に東洋進出を企て交通上並びに軍事上に一大飛躍を試みた事を回顧する。そ

してその勢の趨く處、遂ひに韓國の大同江にまで魔手を延ばすに至つた結果日露の大戦争を生んだ事を知る。その當時支那は唯々諾々として露國に追従し、誠に遺憾な事には今の國民政府のお歴々の様に國權の回復とか、領土の神聖とかを叫ばなかつたのである。事實支那も同腹で露西亞を東洋に誘つて日本を叩きつけ様ごしたのであつた。

東洋平和の爲めに此の不幸なる情勢を轉換せしむ可く努めた日本及び日本人の犠牲と努力ごは、滿洲全領土の能く償ひ得る底のものではない。當時日本は實に光輝ある我數千年の神域を焦土ごするも猶辭せざるの決心によるものであつて、所謂權益を目的とする様な卑俗な考へからでは無かつたのである。之は其の宣戰の詔勅にも明なる如く一に東洋平和の確保に存した事を記憶する。

斯様な歴史を有する滿洲一帯に對して其後日本の執る可き道は極めて明瞭



であつたのである。それは何か。即ち東洋平和の爲め此の地域を絶対に保障確保す可き任務そのものである。何れの國が領土の所有者であるとか、無いか云ふ様なそんな問題では無い。西園寺公はこの大經倫を行はれた明治天皇の遺臣の一重臣として深くこの事情を知つて居られた筈である。

當時天皇を輔佐し奉つた國家の重臣としては山縣公を初め、大山公、松方侯、井上侯、桂公、小村侯、其他多士齊々であつたのである。殊に政治家として日露戰爭の衝に當られた桂公は深く計る處あつて、この宏謨を國民と共に實踐躬行す可く敢へて野に下つて政黨を組織するの舉に出でたのである。大黒柱を失つた一重臣が新帝を載いて國民と共に之の宏謨を繼承せんとするの意氣を示した事は、當時政友會總裁として居られた公は深くその諒解を求められた筈である。處が桂公のこの誠意と意氣とはその緒に就いたばかりで大正二年十月遂ひに薨ぜられた。

時勢は移るご云ふが全くその通りで、明治國政の重心から離れてゐた大隈伯は大正三年四月遂ひに現れて内閣總理大臣の印綬を帶ぶるに至つた。この大隈伯と國策の樞機に關係せられた他の重臣との間に、果して明治の宏謨を繼承す可き國策上の諒解があつたであらうか。

果然大正三年六月二十八日、奥匈國皇儲が塞爾維の一青年に狙撃せられた事から歐州の微妙なる國際關係は俄かに緊張し、同年七月二十八日奥匈國の宣戰布告となり、無限の不安をたゞよはしつゝ次から次へご列強の宣戰布告となり前古未曾有の世界戰爭は展開されたのである。其の原因の奈邊にあつたか、又其の何れが挑戦したものであるごか云ふ事は別問題として、我が日本としては如何に此の非常時局に對處すべきかは實に大日本帝國の運命を支配する重大なる機會であつたのである。従つて我が國家の重臣は明治天皇と云ふ大黒柱を失つた哀愁の涙未だ乾かざるに、寄り／＼相議し相圖り時の大



隈内閣と一大協議を開いたのである。處が時の外相加藤高明男は日英同盟の德義的意味に於て直ちに聯合國に参加すべく強硬に主張した。山縣公を中心とする元老會議は聯合國に参加する事に對して必らずしも反對するものでは無かつたが、その參戰の意義、時期、條件等に就いては大隈内閣とは幾多の相違點があつた様に記憶する。兎に角そのいざこざも徹底的諒解無くして日本は獨逸を中心とする同盟國に宣戰を布告するに至つた。此の戰が何れの勝敗に歸するとも日本は戰爭參加國の一員として、世界の運命と共に一大轉機に立つた譯である。

斯様な時期は國家として十年に一回あるか、百年に一回あるか兎に角容易ならぬ機會であつたが、國家の重臣と時の内閣との意見がしつくり行かぬ儘常に内部抗爭を持續したと云ふ事は、其處に國政運用上の一大禍根が培養せられつゝあつたとも見ねばなるまい。問題は次から次へと起つて來た。その

度毎に山縣公を中心とする元老と、大隈首相と云ふよりはむしろ加藤外相を中心とする意見とが意地悪く衝突した。寧ろ大隈首相は後には仲裁役の様な奇觀をさへ呈したと自分は考へて居る。

日本は明治三十五年一月、日英同盟締結間もなく即ち明治三十七年二月、日露開戰をしたのであるが、日本からすれば英國の爲めに日英同盟を結んだのでは無い。英國も亦日本の爲めに日英同盟を結んだのであるまい。要するに相盟約する事によつて双方の利益は固より進んで世界平和の爲めに貢献しやうとしたものであらう。處が之の歐洲大戰參加の加藤外相の態度は、そう云ふ意味以外に加藤外相自身の英國に對する感情好悪が非常に力強く働いて居つた様に思ふ。よしんば加藤外相の意見通りであつたとしても、加藤外相はこの大戰終了後聯合國の勝として考へた場合、英國は如何なる態度で日本に向つて來るかと云ふ事を洞察し得たであらうか。殊に當時二十一ヶ條な



るものを支那に突きつけて、東洋に於ける日本の立場を鞏固にする様な案を  
將來英國が甘んじて承認するものと思つたであらうか。自分は其處に非常な  
疑惑を持つてゐる。

例へば英國から日本に參戰を求めて來た當時は、單に膠洲灣を根據とする  
獨逸艦隊の掃蕩であつて、青島の要塞には一言も及んで居なかつた様に思ふ。  
之は何を意味するか。我々の考を以てすれば英國は英國の利益の爲めに英國  
の敵である膠洲灣艦隊を日本をして撃滅せしむる爲めであつて、若し山東を  
日本が占領する場合日本の支那に於ける勢力が増大する事を怖れたが爲め  
であらう。こんな大戦參加要求と云ふ様な壇場に於ても用意周到な英國の  
態度を充分考へたならば、山東問題よりはより重大な性質を帯びた二十一ヶ  
條問題に對する英國の態度は、假令一時的には陰忍傍觀することは云ひ乍ら、  
若し戰勝の榮冠を掲げて東洋の天地を一瞥したとき到底彼の是認す可きもの

でないと思ふ事は、この參戰要求の手口に充分表はれて居つたのである。そ  
れにも拘らず加藤流の大戦參加意見を通すと云ふならば、大戦終了後東洋に  
於ける日本の地歩を確保す可き何等かの方法を、如何なる條件によつて得る  
かを考へなければならぬのである。それが無いとするならば、日本は日英同  
盟の存在を英國の爲めに使用した結果になると云はれても致し方あるまい。

我々は歐洲大戦の勃發を以て已むを得ざる不幸と考へた。故に東洋に於て  
將來斯くの如き禍根を一掃するの用意を以て之の大戦に參加する事が日本及  
び東洋の爲めに忠實であるばかりでなく、世界平和の眞の意義をなすもので  
あつたのである。然らば我々の歐洲大戦參加への方法とは何か。之は極めて  
簡單である。前述の意義を以て東洋の禍根たりし露西亞の極東進出に對して  
聯合國への大戦參加を機會として日露の間に徹底的商議を爲す可き事なの  
である。そうする爲めには最もよい機會である事には露西亞は同盟國との陸



戰酣にして、萬一日本が中立乃至同盟國に加擔して露西亞の背後を脅かす事を怖れたから、ポーツマス講和談判の時にも傲然として居つた彼の露西亞皇帝も、言辭を盡して使臣を我が霞ヶ關に幾度もなく通はしめたものである。

露西亞の背後ごは何か、言ふ迄もなく露西亞の侵略的大帝國主義が東へ東へご進み來つて獲得し得たる亞細亞露西亞の大領土そのものである。日本は此の亞細亞露西亞を通過して來るスラヴ族の東方進出に惱まされて、彼の日露の大戦争を展開し漸く奉天に之を破つただけであつて、亞細亞露西亞の領土内には實は一足も踏み込まなかつたのである。然し乍ら露西亞の復讐戦ある可きを豫想して陸軍に於ては日露戦後尙ほ御前會議に於て陸軍二十五個師團案が決定されて居た筈である。即ち極東問題を中心とする日露の關係は一時的小康を保つて居ただけであつて、何時、如何なる時に如何なる事態を勃發せぬとも限らぬ状態であつたのである。此の禍根を除くためには、この露西

亞の痛切なる要求のあつた機會が最もよかつたのである。否、寧ろ先方からこの意味に於て相當突込んだ話し合ひをして來た筈である。此の點は明治宏謨の核心をなす要點であつて山縣公等の深く考へられた點ご記憶するが、大隈首相、加藤外相には左程の注意も惹かなかつた様である。

だからご云つて、我々は獨逸の膠洲灣艦隊を其の儘にして英國の要求を却けよご言ふのではない。此の機會を利用して白人の差し延べたる魔手を東洋より、より多く清算す可かりし事を言ふのである。此の山縣公及び加藤外相を中心とする對立的意見の確執は先づ加藤外相自己の主張を斷行し日本の運命を決定せしめ、續いて内部抗争の結果加藤外相は元老の攻撃に堪へ兼ねて大浦事件に藉口して退却したのである。山縣公は後任外相たる石井子をして遅れ走せ乍ら日露協商を努力せしめ、更に後繼内閣たる寺内伯をして大陸政策遂行の爲めに渾身の努力を拂はしめたのである。然しそれはほんごの遅れ



走せであつて、印度洋及び地中海にまで日本艦隊がエムデンを追ひ廻はした程の働きも取れなかつた。要之國策に對する元老會議と時の内閣との意見が一致しなかつたが爲めである。寺内内閣が山縣公の鞭撻叱咤あつたにも拘らず、雄圖半ばにして倒れた時恐らく山縣公は明治の國策を繼承せしむ可き政治の實行方法を失つたであらう。事實失つたのである。

果せる哉、次に現れた原内閣(尤も之は西園寺公の推薦に係るに聞くと)は、寺内内閣の大陸政策を寺内伯の辭職後繼承す可く、その病床に在りて原首相に懇談を求めたるも、同首相は之を回避して顧る處なく寧ろ弊履の如く之を拋棄して了つた。あの態度は丁度外國人が違つた考へを以てその經營を新にした様な感を深からしめた。尤も我々はチエコ・スロヴァキア援助と言ふ様な西比利亞出兵の事を言ふのでは無い。滿洲及び山東を中心とする大陸政策の事を意味するのである。在り體に言へば原内閣時代は歐洲大戰による日本

の好景氣時代の絶頂で、民心は放漫に流れ財界は一大膨脹を來たした時であるから、明治時代の苦心慘愴たる國家經營の事などは打ち忘れて只有頂天になつて聯合國の勝利と國內の好景氣を謳歌して居たのである。時の政黨が好景氣の餘徳を借り、専ら力を黨勢擴張に傾注せし事も無理からぬ人情であるかは知らぬが、一國の政治家としては愚にもつかぬ場當り屋云ふの外あるまい。

此の黄金時代に西園寺公はお花さんと灘萬の親爺と灘の銘酒とを載せて遙々、公の第二の故郷たる巴里を目がけ舊友クレマンソーを偲び乍ら風流の旅をしたのであつた。こんな勝戦に全權大使として赴任する事は公にしても得意であつたらうし、原さんとしても自分を推薦して呉れた先輩への御恩返しと云ふ様な事も考へたかも知れないが、それは日本の内輪の話で、巴里はそんなところでは無かつたのである。英、米、佛を中心とする戦勝の列強は此



の機會を以て世界の覇權を愈々確實ならしむ可く血みどろの奮闘をして居つたのである。又東洋問題に就いては新聞記者や支那人を煽動して山東の無條件還附、二十一ヶ條の不法等とぼつと日本に當り散らし初めた。おまけにウイルソンあたりから國際聯盟に日本も参加せよと言ふ勸告を受け、國家の主權が制肘される様な條約を只東洋に於ける日本が参加せねば國際聯盟が世界的意味を無くするから、テナうまい事を言はれて、山縣公あたりの心配を押し切つてまで働かせられた外交官もあつた。確か今の内大臣をやつて居られる牧野伸顯伯だつたと思ふ。

兎に角巴里のこの大會議を中心として英、米、佛の世界的覇權は見事に確立せられ、歐洲に於ては佛蘭西、大西洋、印度洋、太平洋に於てはアングロ・サクソン・ドミネーションなるものが光を放つに至つた。西園寺公も牧野伯も此の御光に目が眩んで、將來の日本は此の戰勝の大帝國と協調し、協調の

出來ぬ時は追従し、以て帝國の方針ごししようと考へられたらう事は想像に餘りある。ついでに斯様な威力ある英吉利の内政運用上の議會制度に對しても充分の御研究を遊ばされ、以て將來日本の國政運用上の龜鑑とせらる可く、且つは〇〇を政治の渦中より超然たらしむ可く、悠然として日本に歸へつて來られた。果して西園寺公も侯から公爵とお成り遊ばされ、牧野さんもごんごん拍子に御出世になりと言ふ次第で、まあ新日本の最高指導者ご云ふ位取りである。事實其の後は御兩人の國政運用上に於ける地位は益々鞏固となり政黨の膨脹も買収技術と共に發達し、誰言ふとなく憲政常道ご言ふ様な言葉さへ出來て了つた。従つて大陸政策だごか、國策の樹立だごか、國防の充實だごか、國家主義の徹底だごか言ふ様な事はごんと顧みられず、政治をやる者は金、政治をやる者は地盤、政治をやる者は選舉、政治をやる者はお寺参り、まあこよう言ふ風でお役人になり、金持になり實に優勢なものであつた。



西園寺山御繁昌の程も又御得意の程も思ひ遣られる。

事態こんな風であるから大正十一年の華盛頓會議には海軍主力艦比率五、五、三と云ふ様な屈辱的條約を取り定め、歐洲大戰中に得た處の東洋關係の諸懸案の一である山東問題及び滿洲特種權益を承認せしめたる、石井ランシング協定等は手も無く拋棄して了つた。當時の外務大臣は内田伯であつて今の様に國を焦土としても我が海軍比率を對等ならしむると云ふ様な事は仰言られなかつた。事實内田伯は勢を見る事が敏感であつて、或る時には膨脹し、或る時には收縮し、變轉自在摩訶不思議的存在で將來世界外交官の爲めに迎合の妙を教へた者と云ふ可きか、まあ日本人には珍らしい人である。其點になると幣原男は、華盛頓會議に先づ亞米利加に心酔し、倫敦會議には米國全權團から脱帽敬意を受けただけあつて、滿洲事變勃發當初も深く英米の怒に觸れる事を怖れて、終始一貫西園寺公、及び牧野伯の最高指導精神に殉ぜら

れた様に思ふ。

斯様なお歴々がそろつて居るから頑迷視された日本主義者はその祖國に於て手も足も出ず、只切齒扼腕して居る様な奇觀を呈した。その頃であつたと思ふ。或る新聞の投書欄に「一女學生」として左の様な意味の事が書いてあつた。「毎日省線で通ふのにあのラツシユ・アワーに軍人が劍を佩け、拍車をつけて乗り込むため我々公衆は随分迷惑をする。あんなものは何も平和な日本で身につけて歩く事はあるまい」と。一事が萬事で講和會議以後の陸海軍人の愼ましやかな態度は見るも氣の毒であつた。我々はその當時國際風の傳播力はこんなに迄國民に影響を與へるもの哉と思つた。

然し乍ら人間は空氣のみによつて生きて行く事は出来ない。しかる大地を踏み營々として拮据勉勵しなければその生存さへも不確實である。況んや一國の經營と云ふ事は凡ゆる努力を拂はなければ到底國際間に立ち行くもので



無い。國防も外交も産業も思想も、彌やが上にも充實鍊磨しなければならぬのである。好況景氣に浮かれて國威國權を失墜し追隨に次ぐに追隨を以てする姑息偷安の生活は到底一國存在の上に於て長く承認せらる可きものではない。

現に戰勝國である所の列強は戰後益々緊張し凡ゆる方面に於て新陣容を整へ様と力めた。之は當然同盟軍を倒す可く列國は其の力を大戰に集中せし結果、戰後各國共その勢を自國に還元せしめ更に新なる新國際舞臺に臨む可き當然の任務ではあるけれども、日本の様にダラシ無い政治的活動から見れば實に目醒ましいものがあつた。日本はこの列國の眞劍なる再建運動に對して、フアツシヨとか國粹主義とか、ボルシエヴィズムとか云ふ様な事を單なる學說乃至流行として之を迎へた。日本の指導精神が何處にあるか、世界的理想が何處にあるのか、國民的希望が何處にあるのかさへ定かならず、只譯もな

く世界の動きのままにうろつき廻つた。之が世に言ふ大勢順應主義であらう。戰後の經濟界の第一期の恐慌、即ち大正九年のガラが來る時も大藏大臣で居られた高橋是清子や、日銀總裁で居られた井上準之助氏は存外平氣なもので樂天主義を並べ立てて居つたものである。その點になると大政黨の御連中はいい氣なもので黨勢の擴張と西園寺公の御機嫌取りとさへうまく行けばよいのであつて、新國際形勢の上に日本がどうなるかと言ふ様な事は先づ／＼餘計な事であり立身出世の秘訣ではなかつたのである。どだい元老、内大臣を初め宮中の大官は申す迄も無く政治の指導的中心勢力が斯様であつたから、歐洲大戰後の日本と云ふものは丸で氣の抜けたビールの様なものであつた。列強は恐らく嘲笑して居たであらう。西園寺さんや牧野さんばかりでは無い。劍を佩つた現役の軍人迄がその毛並に順應する者もあつた。

茲に於てかケロツグ不戰條約は國の上下を擧げて歡迎し内田伯等は巴里に



まで出掛けて人民の名に於て調印せられたものである。尤も之は御修正になつた様であるが。けれども我國防を擔任する海陸の精銳は、其職責に鑑み専ら列國との均衡に留意した爲め一世の風潮と隔絶した立場に於て自己の本分に忠實であつた。英米は密かに之を忌避した。従つて大勢順應主義たる政黨政治家は幾度か之に向つてその縮小を促した。殊に英米の世界政策の唯一の武器たる海軍力の見地から我國の補助艦勢力は一敵國であつて、このまゝ放任するならば、加古、古鷹級の精銳なる巡洋艦を日本が造り、折角主力艦五・五・三の比率を決定しても其の目的を達する事が出来ないと言ふ様な事で、遂ひには昭和五年倫敦に海軍會議を開くに至つた。

此の會議に臨む可く我海軍當局者は所謂三大原則なるものを決定して我國防の最小限度のものである事を明にすると同時に、曩の華盛頓會議の失敗に鑑み用意周到にその目的貫徹を期した筈である。當時海軍の決心は非常なも

のであつて、我々も深く之に期待を懸けたのである。處が會議に臨んでからは幾多の猛襲に遭ひ海軍當局よりは寧ろ幣原男の指揮する追隨主義者等は日本海軍の主張を如何にして英米の主張に近づかしむるかに専念して居つて、てんで日本の主張を如何に英米に承認せしむ可きかの努力は見當らなかつたのである。

殊に宮中に蟠踞する大勢順應主義者、事勿れ主義者等は元老西園寺公、内大臣牧野伯等の下風に立つて會議の不成立に終る様な事實があるならば一大事であるから、會議の成立を主眼とこそすれ、日本の主張を貫徹す可き事を深く考へなかつた。従つて當時の濱口民政黨内閣は二百七十餘頭顱の勢を以て元老並びに宮中重臣の意嚮に則り、幣原男の言ふが儘、爲すが儘に進行し所謂大權干犯の處爲在るが如く解せらるゝも辭せず、軍事參議官會議、軍令部の主張を一蹴し倫敦に首を長くして如何致しませうかと言ふ、備はれた全



權、若槻禮次郎氏に回訓を發し斷然米國に追従する事に決定した。

此の無謀なる暴舉は流石の大勢順應主義者は固より、一般識者階級に非常なるシヨツクを與へ、一種の言ふ可からざる不安を抱かしめた。此の會議を中心とする我國朝野の間に行はれた意見の對立抗爭は、上は至尊の叡慮を煩はし、國論不統一の醜態を曝露した。一は大勢順應主義者事勿れ主義、一は自主的外交にして東洋本位、その對立の盛なる事甚だ深刻であつて容易に氷解す可からざるものがあつた。何となれば華盛頓會議に於ては英米は其の招請狀にも示せるが如く會議の基礎を其の現有勢力に置くと主張し乍ら、今回の會議に於ては前回の主力艦の比率を以て會議の基礎となさんとその不合理を強要するのみか、米國の如きは會議の目的として世界平和並びに國民負擔の輕減を主張し乍ら、實は日本の補助艦勢力の發達を抑制し自らの不備なりとする補助艦勢力の一大擴張を行はんとするものであつて、實に會議の結果は

約四十萬噸からの大造艦作用を僅々六ケ年の間に行はんとする海軍大擴張の内容を有するのであるから、何人も一驚を喫せざるを得なかつたのである。

米國は斯様にして大西洋に於ては英國と妥協提携し自らは太平洋の世界的霸權を握らんとするの一大野望を露骨に示したものである。であるから不可思議な事には亞米利加艦隊の任務が亞米利加の領土の保全と云ふよりはむしろ極東の門戶解放と云ふ様な事を表示してゐる。華盛頓會議と言ひ、この會議と云ひ此處まで目の中に指を突込まれる様にさるれば如何に我國民も雖も警鐘を亂打して一大戒心をせねばならぬ破目に陥つた。けれどもお歴々が大勢順應主義であるから樞密院議員の軟派にも渡りをつけ數を以て否應無しに御批准を仰ぐの形勢を作成し遂ひに論功行賞を華々しく行ひ、尙ほ將來の日本をも斯くの如くにして律しやうとしたのである。こは云へ日本國民はお公家さんでもなければ、歐米崇拜者でもない。餘りの事に堪り兼ねて屠腹した



ものもある。又白晝濱口首相を殺傷する者も出て來た。要するに歐洲大戰後の暢氣な大勢順應論や、國際協調主義や儉安姑息的な遣り口や、之らに迎合する政權爭奪本位の政黨政治に對して實はもう飽きくしたのである。こんな連中の言ふが儘にして居つたならば日本は居ながらにして萎縮せざるを得ないご痛感するに至つたのである。

殊に一九三六年乃至三八年の頃に至れば斷然優勢たる可き米國海軍の威風の下に東洋の國家乃至民族は隨々としてその指導に従はねばならぬ運命なる事に想到する時、今にして獨立國家の權威を保持するに非れば聽て噬臍の悔ある可き事を考へたのである。西園寺が何だ。牧野が何だ。政黨が何だ。こんな言葉は津々浦々に滿つるに至つたのである。何人の作爲でもない。飽慢無爲から醒めた不満ご不平と、不安なのである。長袖を着ては此の世界は到底渡り切れぬと云ふ事を感じたのである。

本來の日本に目醒めよ。而して亞細亞に歸へれ。この聲は田中内閣の東方會議に於て先づ森恪君の肺腑より力強く叫ばれた。即ち覺醒の氣運が來たのである。我々は今日加藤高明伯あらば、伯に聯合國に無條件參加の結果は結局英米から諸條約によつて手も足も縛られ、腰の物の一本づゝ抜かれる様にされない保證が他に有りはしなかつたかとお聞きしたのである。今は既に他國の好意に依つて國運を開拓せんとするのいはれなき事が判然したのである。日本はやはり歐米の追従から醒めて亞細亞に歸へり、亞細亞の盟主となつて共に損はれたる亞細亞の心を洗ひ、眞の味方となつて白人の御厄介にならなくとも、自立出来る様に精勵愛撫す可き使命を有するのである。それが自然なのだ。

我國のこの久しい儉安無爲の間に在つて最も悲壯なる心境の下に空しく悲憤の涙を吞み乍ら幾歲月を送つた者がある。それは誰か。言ふ迄もなく明治



國策の守護者であり我國防第一線の保障たる關東軍そのものである。十數萬同胞の鮮血を流せし滿洲の地。且つては全國民の心を戦かせた滿洲の野。又畏れ多くも明治天皇の深く宸襟を悩ませられたるこの邊り。又曾つては八百萬の神々迄も守護し給ふて安泰を得しこの大天地。此處に任務を奉じて、朝な夕なに鍊磨を重ねる度毎に遣る瀨無き護國の涙に暮れたであらう事を考へる時に、我等は吁々、關東軍の感を深くする。華盛頓會議及び倫敦會議によつて嘗めた我海軍の長恨悲憤にも増して戯曲の如く綿々として盡きぬものであつたであらう。私は畏友、村岡長太郎將軍の往時を回想して今も猶暗然たらざるを得ない。大日本帝國の一切の凝滯は即ち我が此の關東軍の血潮より爆發した。一昨秋九月十八日夜の事件は即ちそれである。

時の若槻内閣は驚愕措く處を知らず内外に對して深く遺憾の意を表したの  
は明であるけれども、今日尙ほ黙々として國民の前に明かならざるものは西

園寺公と牧野伯の心境である。然るに爾來約一年余に亘り安全地帯に逃避して巧みに韜晦する西園寺公と牧野伯等を中心とする大勢順應、追隨外交主義者、東洋本位、自主的外交主義者との間には凡ゆる暗闘が繼續せられて居る。先般公等の推薦したる舉國一致非常時内閣、即ち齋藤内閣は實は嘘の皮で時勢を緩和、制止す可き使命の下に温厚なるかの如き齋藤子を推薦したのであらう。果して既成政黨を兩翼とするこの緩和内閣が如何に伸縮自在なる人が居るかは云へ、國を焦土としても滿洲國を承認するに云ふに至つては公等の心事も亦自主獨往の大勢に順應したるか。但しは亞細亞に歸へれの叫びに追従したるか。その何れであらうとも滿洲國承認は事實である。聽て來る可き列國の嫉視排擠は相次いで國際聯盟を中心として勃發するここは明である。公等は之に答へるの用意があるか、公等は軍人がお嫌ひだそうだが左様に偏頗の御考へでは國運の全局につき答へる術もあるまい。



要すれば氣運の到來であり、時勢の推移である。従つて我國運開拓の爲めには今後無限の準備と無限の飛躍を要する。その準備と言ひ、その對策と云ひ、悉く之建國の大精神に則り天地自然の大則に違はざらんとする至誠に據らずんば到底不可能である。藤椅子に寝ころんで世界の大勢を察したり、或は外國使臣と會食して世界の<sup>大</sup>大勢を心得たり顔する様な程度の事では間に合はない。公等は此の新舞臺の上にかくして尙ほ且つ猷替輔翼の重責に當り、乃至は常時輔弼の大任を完ふせらるゝと考へらるゝや。

今日舉國一致を標榜し乍ら未だ何となくしつくり行かぬものあるは公等を中心とする大小當路が依然として我執を棄てざる處にその禍因がありはしないか。若し然らば我國運を害することこれより大なるはなしと言はねばならぬ。卒直に我々の心持を申上げるならば、公等は滿洲國承認を境として御勇退遊ばさるゝが宜しいのだ。それが日本の爲めであり、又公等の爲めでもある。

國際協調主義、實は列強追隨を以て、我が國策の根本方針なるかの如く心得た西園寺公や牧野伯等の、滿洲國承認後に於ける消極的反抗及びその憂慮病は、國政不統一の禍根をなすが故に速かに隱退せらる可き事を勤告した吾人は、時局に就いて更に一言を費さねばならぬ。

察するに今日列國の悪感情は、彼等の白人至上主義の主觀が災するは勿論なるも、又一面に於て多年我國の卑屈なる外交によつて招來したる慣習的讓歩を行はざる新日本の態度を不可思議とする彼等の増長慢あるが故である。若し冷靜に考へた時、日本が東洋平和の爲め滿洲國を承認したからとて世界の何れの國が迷惑するであらう。否、迷惑どころか殆んど何等の利害關係さへ無い國が多いのである。にも拘らず總ゆる壓迫を試みんとする所以のもの



は、要するに日本の大陸及び大太平洋上に於ける勢力の増大を以て白人の従來繼續し來りし東洋侵略政策に一大障礙を來すことを怖れるが故なりと斷ぜざるを得ない。此の私心を以て世界の小國を使嫉し、或は中華民國を煽動して、我が日本を窮地に陥れんとするならば、我々も亦それに對應するの決心を要する。

試みに歐洲大戰を顧みよ。その大戰の理由が如何なるものなりしにもせよ、禍因は結局歐洲各國間に培養せられたのである。而もその禍因の和協手段が講ぜられずして、遂ひに全世界の人々をその渦中に陥れたではないか。尤も亞米利加はこの世界の一大不祥事を傍觀して四年間も大儲けをしてゐたのであるが、日本は當初より聯合國に参加して世界平和の爲めに努力したのである。聽て凱歌を巴里、ヴェルサイユ宮殿は鏡の間に於て擧げた時、一體歐洲に幾つの新小獨立國が出来たと思ふか。數へ見よ。曰く、波蘭。曰く、チエコ・ス

ロヴァキア。曰く、ユーゴスラヴィア。曰く、芬蘭。曰く、エストニア。曰く、ラトヴィヤ。曰く、リトワニヤ。曰く、ダンチヒ。曰く、アイスランド。曰く、墺國の分裂。曰く、イラク。曰く、ヘジャス。曰く、アルメニヤ。曰く、ジョージヤ。曰く、アゼルバイジャン。之等を悉く平和維持の故を以つて、その獨立國としての承認を求めたではないか。然るを歐洲の紛争には世界を參戰せしむ可し。而して新小獨立國も承認す可し。さり乍ら東洋に於ける紛争は助長せしむ可し。東洋の新獨立國は承認すべからず。と云様なへら棒な定義が何處の世界にあるものか。

殊に亞米利加合衆國はウイルソンの名によつて我が日本に對し、極力東洋を代表して聯盟に参加する事を勧誘しておき乍ら、自國はその利害關係に捉はれて聯盟に参加しないではないか。此の亞米利加が聯盟を使嫉したり、聯盟が又その亞米利加を勧誘して日本を壓迫し様としたりするが如き矛盾撞



着、傍若無人の白人通念こそ世界の平和を攪亂するものである。

國際聯盟が滿洲獨立國を承認せぬと云ふならば、翻つて歐洲の新獨立國の承認を取消せ。又我が南洋の委任統治地域を返還せよと云ふならば、先づ舊獨領植民地を獨逸に返還せよ。又國際聯盟軍縮委員會あるに拘らず英米の都合により東洋に於ける日本を壓迫せん爲め亞米利加に開かれた處の所謂華盛頓會議、及び英吉利に開かれた所謂倫敦會議等の諸條約は悉く之を解消して、世界一律、機會均等、人種平等、の定義に還元せねばならない。自國の都合のみを考へて他國の事までも妨害するご云ふ様な白人至上主義、歐米優越觀念は最早新日本に通用す可からざるものである。この通用す可からざる白人通念に盲從して蠢動し來つた人々、及び之等を默認し専ら政權爭奪に没頭して、我が國策を念こせざりし所謂政黨者流の爲めにも一大反省を促さざるを得ない。

昭和八年二月二十三日印刷  
昭和八年二月二十五日發行

〔定價 金貳拾錢〕

著者 實川時治郎  
東京市麻布區霞町六番地

發行者 椎名佐喜夫  
東京市麻布區霞町六番地(實川方)

印刷者 吉田健彦  
東京市麻布區富士見町三十六番地

印刷所 吉田博雅堂  
東京市麻布區富士見町三十六番地

電話高輪四六四五番



